

報告

平成18年度北海道医師会 医療安全研修会（札幌）

本年7月30日（日）午後3時から札幌グランドホテルにて開催した。

ご子息を医療事故による闘病生活の末に亡くされ、また著書の出版や、厚生労働省の医療事故関係検討委員会の委員や参考人を歴任され、また昨年の日本医師会医療事故防止研修会でも講師を務めた稲垣克巳氏を講師に迎え、「医療の安全を願って—医療事故被害者家族の願い—」と題し、以下内容の講演があった。

(1) 遭遇した医療事故について

患者は、ご子息の稲垣克彦氏（当時21歳）。病名は良性のリンパ管腫で、手術のため名古屋大学附属病院の耳鼻咽喉科に入院。1983年7月25日に5時間50分にわたる手術を受け、手術は成功したが、7月27日に手術後の管理が適切になされず、約35時間後に呼吸停止・心停止。一命は取りとめたものの、低酸素性脳障害による後遺症が残存し意識不明。食事は鼻からのカテーテルで流動物を経口摂取。寝たきり生活となる。両親が交代で毎日看病した。

5年後にこれ以上の治療は見込めなくなり、また症状が安定したため、退院し以後自宅療養にて17年間闘病したが、2005年末に体調を崩し、2006年3月に亡くなった。

名古屋大学が非を認めなかったので止むを得ず事故発生から7年後に訴訟を提起し、一審判決までさらに8年かかったが勝訴した。病院に事故に対する反省があれば裁判はやらなかった。医療事故裁判は、健康は戻らない、失った人生は取り戻せないなど、勝ってもむ

なしいものである。

(2) 患者家族の立場から医師・看護師について考えたこと

医療に携わる者にとって、最も大切なのは人間性であり、患者を哀れみいたむ心、思いやりである。

例えば入院中に、毎日言葉をかけてくれる暖かい医師がいる一方、意識がないからと乱暴な扱いをする医師もいた。

また、看護師についても、息子の誕生日に言葉をかけてくれたり花を持ってきてくれたりなど思いやりの心に癒された一方、心を傷つける言葉を投げつける看護師もいた。また食事用カテーテルなどが不潔でも休日だとなかなか取り替えてくれないこともあった。

(3) 医療事故をなくすために

アメリカの統計等を参考にすると、日本では医療事故による死者は年間2万人と推定される。まず事故を隠さないことであり、もしミスがあれば謝ることである。謝ることにより反省が生まれ、反省して原因を徹底的に究明することにつながる。誰がやったかでなく、なぜ起こったかが重要であり、事故を公開して注意を喚起し、同じ事故が二度と起こらないように事故事例を公的遺産として、他の医療機関で繰り返さないように再発防止のシステムをつくることである。

(4) 医療改革

医局制による縦割りの弊害の解消、臨床の重視、専門医や家庭医の充実、医師免許の更新制、医科大学における教育のあり方などが挙げられる。

また、日本はGDP（国内総生産）に対する医療費水準では、イギリスと並び先進国中最低ラインである。

さらに、2005年11月24日の朝日新聞社説によると、100床あたりの看護師数についても、日本は43人であり、アメリカ230人、イギリス128人などに比べ明らかに少ない。

以上のように、少ない医療費、少ない人員によって日本の医療がまかなわれているのが現状であり、事故防止のためにも充実が望まれる。

医療の安全が重視されるようになったのはここ2～3年であり、私はこれからも医療の安全と医療の質の向上を訴え続けたい。

—医療安全部—